

## レコード鑑賞会 プログラム(Web 版)

# ヴェルディ生誕 200 年

平成 25 年 7 月 24 日(水) 13:30~15:30 実施

### 本日の鑑賞曲

『歌劇オテロ』より

第 4 幕 デズデーモナの寝室 32'15"

『歌劇ファルスタッフ』より

第 1 幕第 2 場 フォード家の庭先 15'22"

----- 休憩 -----

『ヴェルディ オペラ序曲・前奏曲集』より 38'39"

《オベルト、サン・ボニファーチョ伯爵》(1839) 序曲 6'53"

《エルナーニ》(1844) 前奏曲 3'13"

《アッティラ》(1846) 前奏曲 4'01"

《群盗》(1847) 前奏曲 5'23"

《リゴレット》(1851) 前奏曲 2'39"

《ラ・トラヴィアータ(椿姫)》(1853) 前奏曲 4'05"

《運命のカ》(1862) 序曲 7'48"

《アイーダ》(1871) 前奏曲 4'37"

### オペラの誕生と発展～ヴェルディに至るまで～

総合芸術といわれるオペラ。その歴史は 16 世紀末のルネサンス時代まで遡ります。フィレンツェの詩人や音楽家たちのグループ「カメラータ」が、ギリシアの理想郷（アルカディア）を求めて作り上げた、すべてのセリフを音楽として歌う劇がオペラの始まりでした。

その後オペラは、ルネサンスからさまざまな舞台仕掛けが施され、歌唱技巧を極めたカストラート（男性去勢歌手）が活躍するバロック時代へと移り変わっていきます。しかし、カストラートの歌を聴かせることに重きが置かれるあまり、物語の展開が二の次とされてしまう弊害が出てきました。そこでボヘミア出身の作曲家クリストフ・ヴィリバルト・グルック（Christoph Willibald Gluck, 1714～1787）はストーリー性を重視し、劇の内容や台詞に調和した音楽に合唱やオーケストラを効果的に取り入れるといったオペラの改革に乗り出します。作曲家としてはモーツァルトに代表されるこの古典派の時代を経て、さらに〈感性の夜明け〉という言葉にふさわしい劇的な作品が続々と生まれたのは、その次に訪れたロマン主義時代のことでした。

ロマン主義オペラの頂点を極めた 2 人、ヴェルディとワーグナーが 1813 年という同じ年に生まれたのは運命でしょうか。彼らが活躍した 19 世紀は激動の時代でした。各地で民族意識が高まり、独立運動が起り、社会や政治体制も新しいものへと変わっていきます。2 人はその流れの中でオペラの新しい道をそれぞれ切り開きました。人間の複雑な心の動きを映したロマン主義の作品は、今日多くの劇場で上演されるスタンダードナンバーとなっています。

## ジュゼッペ・ヴェルディ (Giuseppe Verdi, 1813.10.10～1901.1.27)

ヴェルディは生涯を通じてイタリア自由のシンボルでした。Verdi の各文字が偶然にも、イタリア王国の初代国王ヴィットリオ・エマヌエーレ (Vittorio Emanuele Re d' Italia) のイニシャルと一致していたことから、他国の支配から解放されたいとするイタリア国民の悲願に応えるかの感もあり、彼の音楽はイタリア独立と統一への戦い、リソルジメント運動の雄叫びを上げる人々から熱狂的に支持されました。

しかしそのような時代を背景にしながらも、ヴェルディが愛国的な作風に留まることはありませんでした。彼が生涯を通じて追求したのは従来のイタリア・オペラの定型から踏み出した劇と音楽の合一です。劇的にも音楽的にも一貫して綿密に描かれる愛や憎しみ、悲しみといった人間心理の深淵。ヴェルディはこれまでになかった新しい手法や境地を開拓することでドラマと音楽を密接に結びつけ、人間の感情を奥深くまで表現しようとしたのです。

### 貧しい生い立ち

イタリア・オペラ史における巨人ヴェルディですが、その生い立ちは恵まれたものではありませんでした。ヴェルディは北イタリアの寒村レ・ロンコレに宿屋と雑貨商を営むカルロ・ヴェルディの息子として生まれます。貧しい両親が音楽に夢中になっている息子に与えることができたのは中古のスピネット(小型の鍵盤楽器)だけ。地元ブッセートの名士で音楽愛好家のアントニオ・バレツィにその音楽的才能を認められ援助を受けるものの、系統だった音楽教育を受けなかったヴェルディはミラノ音楽院への入学を拒否されます。挫折を味わい、貧しく惨めな暮らしを送りつつ必死に勉強し、一度はブッセートに戻り生活のために音楽学校の教師となったヴェルディ。しかしヴェルディは再び人生を賭けてミラノへ飛び出し、苦勞と屈辱の日々を重ねた末、ようやく自ら作曲したオペラ《オベルト》をミラノ・スカラ座で上演するところまでこぎつけます。1839年、ヴェルディ 26歳の時でした。

### 成功への道

1作目《オベルト》は飛び抜けた成功でこそありませんでしたが、スカラ座の支配人メレッリはヴェルディの才能を見抜き、2年間に3つのオペラを作曲する契約を提案します。しかし、ようやくデビューを果たしたヴェルディを悲劇が襲います。

ヴェルディはブッセートで音楽学校の教師をしていた1836年に、支援者バレツィの娘マルゲリータと結婚していました。夫妻は2人の子どもに恵まれましたが、1838年に娘、39年に息子があいついで亡くなると、さらに40年には脳炎のために妻マルゲリータも死んでしまいます。ヴェルディは絶望と孤独の中で2作目のオペラを、しかも喜劇を作曲しなければならず、どうにか仕上げた《一日だけの王様》は失敗に終わります。この失敗後、ヴェルディは最後の作品《ファルスタッフ》まで喜劇を書きません。

ところがメレッリは、失敗後引きこもりがちになったヴェルディを見捨てませんでした。次のオペラ《ナブッコ》の台本を渡し作曲を依頼することでヴェルディにチャンスを与えます。台本に魅せられたヴェルディは気力を取り戻し、再び作曲に取り組み始めました。こうして出来上がったヴェルディの出世作《ナブッコ》は1842年に初演され、爆発的な成功をおさめます。新時代を感じさせるエネルギッシュな音楽と愛国的なトーンが、イタリア国家統一の気運を背景に支持されたのです。

この成功によってヴェルディは一躍時代の寵児となりました。売れっ子になったヴェルディは、各地の劇場から依頼を受けます。愛国オペラの傑作《レニャーノの戦い》(1849)まで作曲されたヴェルディ初期のオペラには、多かれ少なかれ愛国的な主題や民衆を感動させる合唱があります。

### 新しいオペラの創造へ

大成功をおさめ人気作曲家になったヴェルディは、次第に人間の心の内面にひかれるようになります。ヴェルディ以前はせむしのリゴレット、娼婦のヴィオレッタのような人物は決して舞台には乗りませんでした。ヴェルディは、複雑で陰影に富んだ人物をオペラに登場させるという新しい試みに挑戦し、《リゴレット》(1851)、《イル・トロヴァトーレ》(1853)、《ラ・トラヴィアータ(椿姫)》(1853)という、心理表現の秀逸さとバランスよく配された娯楽性によって世界的な人気を博す中期の三大傑作を生みだします。これらの作品で、ヴェルディは少しずつ従来の伝統的なオペラ形式と訣別していくのです。

さらにヴェルディはフランスの合唱やバレエがふんだんに盛り込まれたグランド・オペラを取り入れながら、独自の豊かなオペラ世界を創造していきます。1861年イタリア王国が成立し、国民的作曲家となっていたヴェルディは、外国向けに次々と大作を書き上げました。ペテルブルクから依頼された重厚な《運命の力》(1862)、パリ・オペラ座のためのグランド・オペラの傑作《ドン・カルロ》(1867)、カイロで初演した祝典的娯楽大作《アイーダ》(1871)。また宗教曲の分野でも、敬愛するイタリアの国民作家アレッサンドロ・マンゾーニを追悼する稀有の名作《レクイエム》(1874)を発表します。

## 音楽とドラマの融合の完成

名声を得て著作権の収入によって経済的に安定したヴェルディは、ブッセートの近くサン・タガータに農地を所有し、そこに建てた屋敷に2度目の妻ジュゼッピーナ・ストレッポーニと静かに暮らすことを好んでいました。ジュゼッピーナはソプラノ歌手として《オベルト》・《ナブッコ》の上演に手を貸し、その後も生涯にわたってヴェルディを支えた女性です。

1880年、ヴェルディは初めて誰からの依頼も受けずにオペラの作曲に取り組み始めます。ヴェルディが選んだのは昔から憧れていたシェークスピアの作品の一つ、『オセロー』でした。1883年のワーグナーの死も影響を与えたのでしょうか。構想から7年という長い歳月をかけ、推敲に推敲を重ね、あらゆる効果を吟味して書き上げられた《オテロ》は、音楽とドラマの融合を成し遂げた傑作であり、ワーグナーに象徴されるドイツの新しいオペラの流れシンフォニズムに対抗するものでした。《オテロ》が1887年にミラノ・スカラ座で初演された時ヴェルディは既に73歳。70を超えた老人の新作はヨーロッパ中の話題となり、その内容の素晴らしさに誰もが驚嘆しました。《オテロ》の成功後、さらに老年の楽しみとして再び大好きなシェークスピアに遊びながら喜劇《ファルスタッフ》(1893)を完成させたヴェルディは、1901年ミラノで87歳の生涯を終えます。

ヴェルディの主な作品と生涯	当時の情勢
1813年 レ・ロンコレで生まれる。	
1836年 ブッセートでマルゲリータと結婚。	1815年 ウィーン会議が開かれる。
1838年 ミラノへ家族と共に移り住む。	
娘ヴィルジニア亡くなる。	
1839年 《オベルト》ミラノ・スカラ座で初演、	ナポレオン失脚により、イタリアのほとんどが直接的もしくは間接的にオーストリアの
まずまずの成功をおさめる。息子イチーリオ亡くなる。	支配下におかれる。イタリアでリソルジメント（国家統一運動）が起こる。
1840年 妻マルゲリータ亡くなる。	炭焼党（カルボナリーア）が勢力を拡大するも行きづまる。1831年にはマッツィーニが
《一日だけの王様》が失敗におわる。	結社「青年イタリア」を創立。各地で若者たちがゲリラ蜂起を繰り返すが失敗に終わる。
1842年 《ナブッコ》ミラノ・スカラ座初演。大成功をおさめる。	
<p>イタリア各地の劇場から依頼が殺到。ミラノ・スカラ座以外で初めてヴェルディ作品として上演された《エルナーニ》(1844)から《アッティラ》(1846)まで、2年間で5作品を完成させる。ヴェルディはこの時期を振り返って「苦役の年月」と呼んでいる。</p>	
1847年 《群盗》がロンドン・女王陛下劇場で初演。	1848年 フランスで起きた二月革命の影響により、各地で革命が起こる。
イタリア以外での上演は初めて。	1849年 ローマに革命共和政府が樹立され、ガリバルディ、マッツィーニを始めとする共和主義者が集まり戦うが、フランス軍の猛攻撃に陥落。
《リゴレット》(1851), 《イル・トロヴァトーレ》(1853), 《ラ・トラヴィアータ（椿姫）》(1853)の中期の三大傑作を生み出す。	
1859年 《仮面舞踏会》初演。	1861年 ガリバルディが制圧した南イタリアをサルディーニャ王ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世に献上し、イタリア王国が成立する。
ストレッポーニ（44歳）と正式に結婚。	1866年 プロイセン軍がオーストリアに快勝し、プロイセン側についてイタリアはヴェネツィアを回収する。
1862年 《運命の力》初演。	1870年 イタリア政府はローマに軍を送り街を占拠する。翌71年にイタリア王国の首都がローマに定められる。
1867年 《ドン・カルロ》(五幕版)初演。	
1871年 《アイダ》初演。	
1874年 《レクイエム》(独唱と合唱とオーケストラ)初演。	
1887年 《オテロ》初演。	
1893年 《ファルスタッフ》初演。	
1901年 ミラノのホテルで死去。	

# オテロ 第4幕 デズデーモナの寝室 32'15"

初演:1887年2月5日 ミラノ・スカラ座

使用LP:ヴェルディ:歌劇「オテロ」全4幕(資料番号:42150185 請求記号:CLP15 85 0015)

1976年12月7日ミラノ・スカラ座録音

カルロス・クライバー指揮、ミラノ・スカラ座管弦楽団、ミラノ・スカラ座合唱団  
ブラシド・ドミンゴ/オテロ(テノール)、ピエロ・カップリチリ/イアーゴ(バリトン)、  
ミレラ・フレーニ/デズデーモナ(ソプラノ)

※ミラノ・スカラ座のオペラ・シーズン開幕公演。クライバーはベルリンに生まれた現代を代表する名指揮者で、スカラ座でイタリア人以外の指揮者によって《オテロ》が上演されたのはこれが初めて。大成功をおさめました。

## 作品について

ヴェルディが自らの芸術理念に突き動かされて新境地に踏み込んだ大傑作。旧来のオペラ形式は存在せず、揺れ動く人間の心理そのものをえぐり出し旋律に溶け込ませる、まさに「音楽によるドラマ」といえる作品です。台本を書いたのは非凡な文学的資質を備えた詩人アリゴ・ボーイト。ヴェルディは、自分の意をくみ優れた台本を書いたピアヴェを失って以来、台本作者に不自由していました。そんな彼にとって、29歳年下のボーイトとの出会いは創作意欲を再び刺激させるものであり、彼らは7年にもわたる往復書簡を交わしながら共同作業を行います。

シェークスピアに魅せられていたヴェルディは、《オテロ》を作曲するならば新しい技法を模索する必要があると考えていました。そのため構想を温めながらもなかなか作曲に着手せず、全幕の音楽が完成したのは1885年、ヴェルディ72歳の時です。それからオーケストレーションにかかり、翌1986年12月に全てが完成しました。

## 第1幕～第3幕までのあらすじ

ヴェネツィア共和国の将軍オテロは、キプロス島の新総督としてトルコ艦隊を破り凱旋する。そのオテロを恨んでいたのが旗手のイアーゴ。彼はまずオテロの副官カッシオを失脚させるため、強引に酒を勧める。泥酔し刃傷沙汰を起こしたためオテロに解任されてしまったカッシオ。彼はイアーゴに唆されオテロの妻デズデーモナにとりなしを頼む。イアーゴの狙いはオテロに妻とカッシオの仲を疑わせることだった。

イアーゴの奸智にまんまとはまり、愛妻の不義を疑うようになったオテロはデズデーモナが差し出したハンカチを投げ捨ててしまう。イアーゴはそれを自分の妻でありデズデーモナの侍女でもあるエミーリアから入手。カッシオがそのハンカチを持っている姿をオテロが目撃するように画策する。カッシオが妻のハンカチを取り出すのを見たオテロは妻の不義を確信し、自らの手で妻を殺すことを決意する。

## 第4幕 デズデーモナの寝室

管楽器だけで奏される悲しげな前奏曲が流れる。イングリッシュ・ホルンのソロが奏でる「柳の歌」の旋律を背景に幕が開き、デズデーモナの寝室が現れる。死を予感するデズデーモナは、侍女エミーリアに髪をといってもらいながら、昔愛する男に捨てられた哀れな女中が歌っていた「柳の歌」を思い出す。木管の前奏に続いて歌われる「柳の歌」。

「歌いつつ泣く 寂しい荒れ野の悲しげな女。  
おお、柳！ 柳！ 柳！と座って頭（こうべ）を胸の上になだれていたの！  
おお、柳！ 柳！ 柳！と  
歌いましょう！ 死の柳は、私の花飾りとなりましょう」。

「あの方は一栄誉のために生れ、私は愛するために生まれたの…。  
私は彼を愛するためにそして死ぬために」。

エミーリアが出て行った後、デズデーモナは膝まずき、就寝前の「アヴェ・マリア」の祈りを唱える。その静かな祈りはピアノで消える。

そこにオーケストラの奏でる心の動揺と慟哭と共に静かに入ってくるオテロ。オテロは寝台に近づき妻の寝顔に接吻する。目覚めた妻は「ここにいるのは誰」と起き上がる。妻の不義を問うオテロと潔白を誓うデズデーモナ。二人の会話は罵声と悲鳴になり、恐ろしい音響とともにオテロは無実の妻の首を絞めて殺してしまう。

「墓のように静かだ」とつぶやくオテロ。その直後駆けつけた侍女エミーリアは、「この男が私の手からあのハンカチを力づくで奪ったのです」と、夫イアーゴの奸計を暴露する。

真相を悟ったオテロは激しい怒りに剣を振り上げるが、死んだ妻を見て絶望し「たとえ私がまだ武器を持っていても恐れなくてくれ。…おお！ 栄光よ！ オテロは死んだのだ」とその剣を取り落とす。そして妻をじっと見つめ「お前は…なんと青ざめていることか！」と語り、隠し持っていた短刀を自らの胸に突き立て、「口づけを…もうひとたび口づけを…」と妻にじり寄りながら事切れる。

## ファルスタッフ 第1幕第2場 フォード家の庭先 15'22"

初演:1893年2月9日 ミラノ・スカラ座

使用LP:歌劇「ファルスタッフ」(全曲) (資料番号:40089492 請求記号:CLP15 M426/428)

1950年4月1日及び8日の放送録音

アルトゥーロ・トスカニーニ指揮、NBC交響楽団、ロバート・ショウ合唱団  
ジュゼッペ・ヴァルデンゴ/ファルスタッフ(バリトン), アントニオ・マダーン/フェントン(テノール),  
フランク・グアレラ/フォード(バリトン), テレサ・シュティヒ・ランダル/ナンネッタ(ソプラノ)

※NBC交響楽団はアメリカに1937年に設立されたオーケストラ。1954年まで活動し、20世紀の名指揮者トスカニーニのもと多くの録音を残しました。

## 作品について

前作《オテロ》で音楽とドラマの融合を完成させたヴェルディ。彼が最後の最後に辿り着いたのは、日常生活に題材をとった喜劇的なオペラ、〈オペラ・ブッフア〉の世界でした。

《オテロ》で組んだアリゴ・ボーイトがシェークスピアの『ヘンリー4世』と『ウィンザーの陽気な女房たち』を組み合わせ、その両作品に登場するファルスタッフを主人公にした台本を着想したのがきっかけです。ファルスタッフは、放蕩者で、飲んだくれ、大食漢、助平爺、大嘘つきといったとんでもない太鼓腹の人物です。ヴェルディはボーイトのファルスタッフの構想に強くひかれました。そして台本が出来上がると《オテロ》の時とは異なり比較的早いペースで作曲を進めます。あらゆる規律から解放され、悪戯をしては失敗し、失敗しても空威張りをし、「名誉で飯が食えるか」と説教するファルスタッフは、初演時に80歳に達していた老ヴェルディのある意味分身だったのかもしれませんが。失敗に終わった《一日だけの王様》以来遠ざかっていた喜劇。ヴェルディの喜劇2作目にして最後の作品《ファルスタッフ》の初演は大喝采を浴びました。

## あらすじ

舞台はヘンリー4世治下のウィンザー。医師カイウスがガーター亭に飛び込んできて、太鼓腹の老騎士ファルスタッフの悪行をなじるところから物語は始まる。ファルスタッフはカイウスを相手にせず、2通の恋文をフォード夫人アリーチェとページ夫人メグに届けるよう子分に命令する。全く同じ内容の恋文を受け取った2人は腹を立て仕返しを計画。アリーチェはファルスタッフに色よい返事をして自宅に誘い出し、やってきた彼を他の夫人たちと共謀して洗濯籠に押し込め、最後はその洗濯籠ごと川に放り込んでしまう。

散々な目にあいた暮れのガーター亭で不機嫌そうに飲むファルスタッフ。そこにアリーチェがお詫びをしたいとクイックリー夫人を介して伝えてくる。再びその気になったファルスタッフがやってきたのは深夜のウィンザーの森。妖精の女王に扮したアリーチェの娘ナンネッタの登場に、迷信深いファルスタッフは悲鳴を上げ平謝りする。フェントンとの結婚に反対していたフォードは、この機に乗じてナンネッタとカイウスを結婚させようと画策するが、アリーチェの機転によって失敗してしまう。気を取り直したファルスタッフはニヤニヤして「恥をかいたのは誰ですかね」と怒るフォードに問いかける。フォードが敗北を認めめでたくナンネッタとフェントンの結婚を許すと、最後は一同愉快地「世の中すべて冗談さ」。

## 第1幕第2部 フォードの館のそばの庭園

軽やかな音楽で幕が開くと、アリーチェとメグの両夫人、ご近所のクイックリー夫人、アリーチェの娘ナンネッタが挨拶している。メグがファルスタッフから恋文をもらったという、アリーチェも驚いて恋文を出す。手紙の内容は全く同じ。2人は交互にファルスタッフからの恋文を、美しいメロディーにのせて読んでいく。最後にトリルがついて終わると、四人の女たちは「ハハハハ」と16個の音符で哄笑する。続いて「あの飲んだくれの太鼓腹に復讐を」と語るアリーチェから始まる、4人の女たちによる四声部の和声進行でできた四重唱がめまぐるしく展開する。女たちが会話を交わしながら立ち去ると、アリーチェの夫フォードを追ってカイウス、ファルスタッフの子分バルドルフォとピストーラ、若いフェントンが登場し五重唱になる。皆一団となってフォードにファルスタッフの悪行や恋文の一件を低い声でささやき、「ご用心なさい!」と警告する。

以前から恋仲のナンネッタとフェントンはお互いの姿を認め、人目を盗んで二人きりになると美しい二重唱を繰り返す。途中女たちが戻ってくるので中断するが、彼女たちがいなくなるとまた2人で歌い始める。

「口づけされた唇は、永遠に幸せを失わない」

「かえって、月が夜毎に変わるように新しく幸せを運んでくる」

ナンネットとフェントンが別れた後、再び現れた男たちと女たちはそれぞれに復讐計画を語りながら壮大なアンサンブルを展開する。男たちに加わったフェントンの語る美しい愛の夢が、女たちの八分の六拍子と男たちの二分の二拍子が絶妙に絡まり合う。男たちが去った後なおも女たちはファルスタッフが送ってきた恋文の中の語句を繰り返し、大笑いをしながら別れてゆく。

**ヴェルディ オペラ序曲・前奏曲集より** 38'39"

使用LP:ヴェルディ オペラ序曲・前奏曲集 (資料番号:42177725 請求記号:CLP10 S0774)

1975年9月10日 ベルリンでの録音

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

※カラヤン&ベルリン・フィルによるヴェルディの序曲・前奏曲集。カラヤンの1970年を代表する名演。収録されているほとんどが、カラヤン唯一のヴェルディ録音版です。

ヴェルディが作曲したオペラのうち、**Sinfonia** と名づけられた長大な序曲をもつものは初期のオペラか、もしくはバレエなどを取り込んだグランド・オペラ様式をとったわずかな数曲にすぎません。他は短い前奏曲 (**Preludio**) か、あるいは《オテロ》、《ファルスタッフ》などのように、ごく簡潔な序奏とともにいきなりドラマの幕が開く形になっています。音楽とドラマの合一を追求したヴェルディの姿勢がうかがえます。

## 《オベルト、サン・ボニファーチョ伯爵》(1839) 序曲

ミラノ・スカラ座で上演されたヴェルディ最初の作品です。恋人に裏切られたオベルトの娘レオノーラ。しかもその恋人に父を殺され絶望した彼女は、最後は修道院でひっそりと余生を送る覚悟を決めるという内容の悲劇です。まだそれまでのオペラの伝統と慣習の枠内に留まっているとはいえ、そこかしこにヴェルディ独自の個性が表れています。

この序曲は管弦楽曲としてもヴェルディが作曲した最初の作品で、全体は緩急の二つの部分から成り、それぞれオペラに登場する主要な旋律や素材を用いて構成されています。全管弦楽が強奏する4つの和音に続いて、トランペット、そしてクラリネットが次から次へとオペラのテーマを奏でていきます。そして最後は再び全管弦楽によって力強く結ばれます。

## 《エルナーニ》(1844) 前奏曲

ヴェルディにとって初めてミラノ・スカラ座以外の劇場で上演された作品です。初演の舞台はヴェネツィアのラ・フェニーチェ劇場でした。原作はフランスの文豪ヴィクトル・ユーゴー、台本はこの後ヴェルディと組んで数々の名作オペラを生み出すピアール・ヴェズです。オペラの内容は、元貴族で山賊に身を落としたエルナーニと彼を愛するエルヴィーラの悲劇。最後自ら立てた誓いを守るために短刀で胸を突き、エルヴィーラに生き続けて欲しいと願って絶命するエルナーニ。ヴェルディはこの《エルナーニ》で初めて、激しいドラマの中に生きる一人の人間の個性や感情の表現にその焦点を合わせるようになります。

わずか30小節足らずの前奏曲は、完全終止しないまますぐに幕が上がって次の導入曲へと続いていきます。この前奏曲でヴェルディは、ドラマの中で重要な意味を持つ2つの旋律を素材として、簡潔な形で一つの完結した音楽を作りだしています。最初のテーマはトランペットとトロンボーンによって奏される鋭い旋律。もう一つは弦が奏するカンタービレ（歌うように演奏される曲）の優美な旋律です。

## 《アッティラ》(1846) 前奏曲

紀元前5世紀中頃のイタリアが舞台です。イタリアに攻め込んだフン族の王アッティラを倒し復讐を成し遂げるといふ内容のこのオペラは、たくましい力に満ちた音楽の高らかに謳う愛国的オペラの延長線上にありながら、そのドラマの中に登場する人物たちの感情や心理表現にヴェルディの視点が向けられるようになったことがうかがえる作品です。

短く簡潔な中に英雄アッティラの悲劇が象徴される前奏曲は、チェロとファゴットの陰鬱な低音から始まります。次いで木管による7つの和音が重なり、悲劇的な緊張を作り出します。弦の美しい情熱的な旋律が現れ何度か繰り返された後、再びトロンボーンが冒頭の低音主題を力強く表現し最後は和音で終わります。

## 《群盗》(1847) 前奏曲

ヴェルディがイタリア以外の劇場のために書いた最初の作品で、ロンドンの女王陛下劇場で初演されました。しかし《群盗》はロンドンでの初演こそまずまずの成功をおさめますが、すばらしく人気をさらったというわけではありません。とはいえ、人間の性格や感情の深さを音楽の中に表現しようとしたヴェルディの姿勢は、匪賊に身を落とした伯爵の息子カルロがわが身に絶望しながら、愛するアマーリアをその剣で刺殺するという物語のいたるところに示されています。

前奏曲の冒頭は力強い序奏で始まります。続いて弦の刻む和音とリズムにのって独奏チェロによる美しいメロディが奏でられ、さらに冒頭の音楽がもう一度再現されそこに独奏チェロが加わります。つまりこの前奏曲は、3部形式の小さなチェロ協奏曲ともいえる性格をもっています。

## 《リゴレット》(1851) 前奏曲

ヴェルディがいよいよ独自の作風「音楽とドラマの合一」を目指して個性を開花させた中期の傑作です。ヴ

ヴェルディはこれまで考えられなかったせむしのリゴレットを登場人物にし、従来のイタリア・オペラの定型から大胆に踏み出しました。道化師リゴレットが殺し屋を雇って自分の娘をたぶらかした憎き公爵を殺そうとするも、逆に公爵をかばった娘がその殺し屋に殺されてしまうという悲劇。それぞれの登場人物の性格をヴェルディは音楽によって見事に表現しました。音楽表現とドラマの一致を試みた《リゴレット》は音楽劇として隙のない完成度を誇り、大成功をおさめます。

前奏曲は、金管楽器が奏でる重いリズムの音型と、それに続く低音の緊迫した和音による、劇中に何度も登場する〈呪いのテーマ〉に導かれた、わずか35小節ながら悲劇を暗示した強烈な効果を持つ曲です。

## 《ラ・トラヴィアータ(椿姫)》(1853)前奏曲

《リゴレット》と並ぶヴェルディ中期の傑作の一つで、豪華絢爛で、甘く情熱的なメロディ満載の純愛悲恋ものということで大人気のオペラ。男性優位のオペラを書き続けたヴェルディにとっては異色作で、高級娼婦ヴィオレッタの悲しい恋心の綾を繊細に描ききったのが本作品です。

冒頭、静かにゆったりしたテンポ（アダージョ）で、ヴァイオリンがこれから始まる悲劇を予感させる、悲しげなメロディを奏でます。ヴィオレッタの死で結末を迎えるアルフレードとの切なく悲しい愛の行方を暗示する、印象的な前奏曲です。ちなみにヴェルディは『椿姫』の名で親しまれてきた原作戯曲を「トラヴィアータ」（道を踏み外した女）に改題しています。

## 《運命の力》(1862)序曲

ヴェルディの中期から後期にかけての実験的な作品で、これまでの形式を打破したこのオペラは、過酷な運命に翻弄される3人の男女の生き様を、時に烈しく時に静かに描いた壮大な人間ドラマです。愛するレオノーラが兄に刺され死んだ後、絶望したアルヴァーロが断崖から飛び降りて自殺してしまうというあまりに陰惨な話だったので、1869年のスカラ座での上演時に改訂され、現在のレオノーラの死をアルヴァーロと神父グエルディアーノが静かに看取るという結末になりました。

この序曲はヴェルディが書いた中でも最も有名なもので、独立してよく演奏されます。最初に金管が主音を3回鳴らした後、〈運命のテーマ〉を始めとした劇中のさまざまな場面で流れるテーマが取り入れられ、劇全体の内容をコンパクトに暗示しています。初演版では短い前奏曲でしたが、結末と同じく大幅に改訂され現在の形になりました。

## 《アイーダ》(1871)前奏曲

ヴェルディがエジプトの首都、カイロに建設された歌劇場のために書き上げた作品で、壮大な舞台が映える豪華絢爛な〈スペクタクル・オペラ〉の代表格です。凱行進曲やバレエの場面が中心に据えられていて、祝祭的な色合いが強い仕上がりとなっています。それまでのオペラでは伝統的に声部に従属していた管弦楽ですが、ヴェルディはその管弦楽に声部と対等な地位を与え、豊かな感情や全体にみなぎる緊迫感を壮大な効果をもって表現することに成功しています。

前奏曲では冒頭ヴァイオリンのピアノで現れ、さまざまな対位を伴って反復される〈アイーダの愛のテーマ〉と、チェロのピアノで始まって下降し、規則的なリズムを刻んで威圧するかのよう次第に強さを増す〈権力のテーマ〉の2つの主題が絡み合い対立しながら盛り上がり、最後は悲劇の前触れらしく消え入るように終わります。アイーダへの愛を貫き地下牢で死を覚悟したラダメスと、彼と運命を共にすることを決意し忍び込んだ地下牢で息絶えたアイーダ。2人の不幸な運命を象徴するような、緊張のみなぎったわずか53小節の短い曲です。

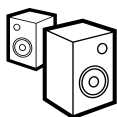
### 【使用LP】

ヴェルディ 歌劇「オテロ」全4幕(資料番号:42150185 請求記号:CLP15 85 0015)

歌劇「ファルスタッフ」(全曲) (資料番号:40089492 請求記号:CLP15 M426/428)

ヴェルディ オペラ序曲・前奏曲集 (資料番号:42177725 請求記号:CLP10 S0774)

### 【使用機材】



TANNOY CANTERBURY15 044799

KENWOOD KP9010 90800145

Accuphase C-200X

marantz SM6100SA





## 【参考文献】

### イタリア・オペラの全貌について詳しく知りたい！

○「イタリア・オペラ 上/下」音楽之友社編 1998（請求記号:AV 766.1GG 189 1/2）

イタリア・オペラをヴェルディ以前、以後に分け、概要とあらすじ、各幕の観どころや聴きどころなどを紹介しています。イタリア・オペラの全体像をつかむのにうってつけの一冊です。

### ヴェルディの生涯を詳しく知りたい！

○「ヴェルディ」ディーンレー・ハッセー著 永竹由幸訳

音楽之友社 1974（請求記号:県立 762.7E 7）

○「評伝ヴェルディ 第1部/第2部」ジュゼッペ・タロツィ著 小畑恒夫訳

草思社 1992（請求記号:AV762.37AA 21/22）

『ヴェルディ』はヴェルディの生涯をその作品も含めて解説しています。巻末の年表はかなり詳しく、同年代の音楽家一覧もついています。さらにもっと詳しく知りたい人におすすめの本が『評伝ヴェルディ』です。まさにヴェルディの生涯を追体験できる一冊。原作は成功をおさめた後の後半生を描いた第2部が最初に出版され、その後に第1部が出ましたが、ヴェルディの人生を誕生から順に追っていくには第1部を先に読むことをおすすめします。巻末に当時のイタリア情勢についてのまとめもあり、ヴェルディが生きた時代背景まで知ることができます。

### ヴェルディの作品について詳しく知りたい！

○「ヴェルディ 全オペラ解説 1/2」高崎保男著

音楽之友社 2011/2012（請求記号:AV766.1 284 1/2）

○名作オペラブックスシリーズ 音楽之友社 アッティラ・チャンパイ編 ディートマル・ホラント編 1988

「アイダ」（請求記号:AV766.1 B 8 13）

「オテロ」（請求記号:AV766.1 B 8 17）

「ファルスタッフ」（請求記号:AV766.1 B 8 19）

『ヴェルディ 全オペラ解説』は日本を代表するオペラ研究家高崎氏による非常に詳しい作品解説集です。各作品が書かれた背景やあらすじ、音楽についての詳細かつ分かりやすい説明が掲載されている本書。残念なことにまだ第2巻までしか出ておらず、取り上げられている作品は《ラ・トラヴィアータ》までとなっています。第3巻が出るのが待ちきれない、そんな人におすすめなのが名作オペラブックスシリーズです。各作品の解説に加えリブレット（台本）の対訳までついている本格的な解説書です。

### ヴェルディのオペラ作品を観たい！

→こちらは館内閲覧のみになります。下記に紹介した以外の作品も所蔵しています。

○『歌劇「ナブッコ」全4幕』（請求記号:DV76.2 ヘルテ）

1979年 パリ・オペラ座 ネッコ・サンティ指揮

○『歌劇「イル・トロヴァトーレ」全4幕』（請求記号:DV76.2 ヘルテ）

1978年 ウィーン・国立歌劇場 ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮

○『歌劇「仮面舞踏会」全曲』（請求記号:DV76.2 ヘルテ）

1990年 ギルツブルク祝祭大劇場 ゲオルグ・ショルティ指揮

○『歌劇「オテロ」全4幕』（請求記号:DV76.2 ヘルテ）

1976年 パリ・オペラ座 ゲオルグ・ショルティ指揮

○『歌劇「ファルスタッフ」全3幕』（請求記号:DV76.2 ヘルテ）

2001年 ジュゼッペ・ヴェルディ劇場 リッカルド・ムーティ指揮

### ヴェルディの楽譜が見たい！

→こちらは館内閲覧のみになります。詳しくは職員にお尋ねください。

所蔵楽譜:《リゴレット》、《仮面舞踏会》、《運命の力》、《アイダ》、《オテロ》、《ファルスタッフ》など

### ヴェルディの作品が聴きたい！

→視聴覚資料室にレコードが多数所蔵されている他、《オテロ》や《アイダ》を始めとしたCDも所蔵しています。詳しくは職員にお尋ねください。